

英語授業の

心・技・愛

小・中・高・大で変わらないこと

静 哲人



正頭英和

小林 翔

研究社

本書の性格（はしがきに代えて）

本書は、『英語授業の大技・小技』、『英語授業の心・技・体』（いずれも研究社）に続く、『英語授業の～』シリーズの第三作とも言える一冊です。シリーズとは言え、最初の二作は私(静)の単著で、本書は正頭英和、小林翔両氏との共著です。本書の性格付けをより良く理解していただくために、まず『大技・小技』と『心・技・体』について少し説明しておきたいと思います。

『大技・小技』

『英語授業の大技・小技』は1999年に出版されました。静は1984年度から1993年度まで中高一貫校および高校で教え、1994年度から1998年度の半ばまで高等専門学校で教えており、1998年の秋に大学に移ったばかりでした。つまり『大技・小技』はそれまで約15年間にわたって中等教育機関の生徒もしくは学齢がそれと同等な学生(高専にはおよそ15～20歳の学生が在籍していますが、英語教員が主として関わるのは15～17歳です)を教えてきたのを総まとめするようなタイミングで著したものです。

私の最初の案では書名は『英語教師の小技・大技・必殺技』でした。教育的な観点から「必殺」はまずいですが、ということになって最終的には『大技・小技』に落ち着いたのですが、この書名のエピソードからもわかるように、「こんなやり方もできますよ、あんなやり方もできますよ」というスタンスで、様々な「技」を列挙したテクニク集です。

奥付の著者紹介には自ら「趣味は授業。夢は地上最強の英語教師を養成すること」と書きました。「地上最強の英語教師」というのは10代の頃から憧れていた(実戦的空手流派である)極真空手の記録映画のタイトル『地上最強のカラテ』をもじった表現です。体育会系の雰囲気や英語授業に持ち込む傾向のある著者のキャラクターを想像してもらえましょう。私の、英語教師における「最強」のイメージとは、どんな学校現場のどんな生徒

を相手にしても、がっちりコントロールして、無理矢理にでも勉強させ、結果的に英語力をつけさせることができる、といったものです。

執筆当時の私は38歳で、世の中の英語教師に向けてバラエティに富んだ自分の授業実践を提示し、自分自身の評価を世に問うような気持ちがありました。目次から拾ってみても「秘技：発問すべてテスト法」「立って座ってリピーティング」「ぶつ切りディクテーション」「アイコンタクト客観採点」「困った時の壁頼み」「剣道型審査方式対話テスト」「木箱で即席スピーカーズ・コーナー」「シールと記録で活発議論」等々...いわば「華麗な」アイデアが53項目にわたって紹介されています。

『大技・小技』は初心者には誤読される

手前味噌ですが、『大技・小技』は今読み返してみても素晴らしい本です。しかし、ではこの本を英語教員志望の学生や、若手教員に勧めるかと今問われれば、即答はできません。その理由のひとつは、内容があまりに「華麗」すぎるために、英語教師の初心者はもとより、初級者でも、またひょっとすると中級者でも、授業の本質ではなく「技」の表面にばかり目がいてしまうことを恐れるからです。

実際、ある時、おそらく20年以上のキャリアを持っていた先生からこんなことを言われて、大変がっかりした覚えがあります。

「静先生、こんど私は指導主事の前で研究授業をしなくてはならないのですが、アイデアが浮かばなく困っています。なにか目新しい『技』はないでしょうか。お知恵を貸してください...」

この先生にとっては『大技・小技』は単なるアイデア集にしか見えていなかったのだと思います。読む人が読めば『大技・小技』の本質は、紹介されているひとつひとつの「技」にあるのではなく、それを生み出した「生徒に力をつけるためなら何でもやってやろう!」という教員の「心」にあることがわかるはずです。それに気づき、また自分でもそういう「心」を持てたなら、「新しい技」など、いくらでも自分で考えだすことができるはずなのです。ところがこの先生は、授業の「見てくれ」を飾る目新しいテクニックを私に教えてもらって参観者を感じさせよう、という発想に

なっていました。こういう人には『大技・小技』は早過ぎるのです。

『大技・小技』が初心者には早いもうひとつの理由

学生や教員の初中級者に軽々に『大技・小技』を読ませるのがためられる2つ目の理由は、紹介している「技」の中には、前提として「体」や「心」がないと使えないものも多いからです。実際、次のような感想をもらうことも少なからずありました。

「先生が書いている技はほとんど私には使えません」

「静さんだからできるんだよ。普通の人には無理だよ...」

例えば「各文パラフレーズ授業」という技があります。簡単に言うと、教科書本文の英文のひとつひとつについて、(1) 教師が音読する、(2) 生徒がパラフレーズする、(3) 教師が模範のパラフレーズを示す、という方法で理解を進めながら同時にスピーキング練習もしてゆく、という技です。これは当然、教師は教科書の文を自由自在に難易度調整しながらパラフレーズしてゆく能力があるという前提で、授業方法を提案しています。しかし生徒にパラフレーズ練習をさせる以前に、教師がパラフレーズを臨機応変にしてゆけないのでは話になりません。これは「技」の知識を与えても「体」である英語運用力がついてこなければ使えない「技」の例です。

また「居眠り禁止の3段階方式」という技があります。生徒を当て、答えられなかったら立たせます。立っている状態の生徒をまた当て、答えられなかったら今度は椅子の上に立たせます。椅子の上に立っている状態で答えられたら、床に立っている段階に戻します。床に立っている状態で答えられたら椅子に座った状態に戻します。このような(1)着席段階、(2)床に立っている段階、(3)椅子に立っている段階、の3段階を活用して授業する、という技です。この方法は女子学生も多かった高専のクラスで実際に私はやっていましたし、男子クラスなどでは大受けでした。

しかし、この「技」は、まず教師が「椅子の上に立て」と指示できる気持ちがあり、かつその指示に生徒が従わざるを得ない威厳が教師にあり、かつそれによって授業の雰囲気良くなるようでないといえませんが、つまり「心」の上に成り立っている「技」なのであり、「心」がない人が表面

的に「技」を盗もうとしても無理なのです。

『心・技・体』

今、私として学生や若手教師に一冊目に読んでもらいたい(正確には、本書が出る以前に、読んでもらいたかった)のは、迷うことなく『英語授業の心・技・体』です。これは2009年つまり『大技・小技』の10年後にまとめたものです。その10年間、私は関西大学および関西大学大学院の教員として英語教員志望学生の授業を担当し、かつ研修やセミナー講師、研究授業の助言者などとして現職教員に接する機会も『大技・小技』以前とは比べ物にならないくらい多くなっていました。

その10年間でわかったことのひとつは、それまで自分が当たり前だと思っていたことが、多くの教員志望学生や現職教員にとって当たり前ではないということでした。端的に言ってしまうと、1999年以前に前提としていた「英語教員は英語ができて、生徒にも英語ができるようにしてやりたいと強く願い、熱意を持って授業を展開するものだ」という英語教師像がやや現実離れした理想だということに気づいたのです。

生徒に英語の力をつけるのが英語授業の最大の目的だという大前提から同意できない人も多くいます。おそらく自分に対する自信のなさから、生徒に対して厳しく接するだけの気持ちが持てない人も多くいます。英語の発音がひどい人も多くいます。/r/が発音できない人さえいます。教科書本文をすらすらRead and Look Upできない人もいます。正しい英語で英問英答できない人もいます。生徒が発した英語の誤りを瞬時に聴き分け、すぐ訂正できる人はほんの一握りの例外です。

後進に宛てて

そういう現実を出発点として、これから教師になろうとする学生や若手、あるいは自分より歳下の教師を主とした読者として思い浮かべ、先輩として思い切り「上から目線」で後進・後輩に噛んで含めるようなつもりで書いたのが『心・技・体』でした。主として同輩や先輩を意識して、いわば自分を精一杯アピールするような気持ちで書いた『大技・小技』とはまったく違い、48歳の英語教師として、「新しい酒」はもう入れることが難し

いであろう「古い革袋」たる同輩や先輩のことは気にせず、まだ「新しい革袋」の20代30代の若手や学生に向けてのみ思いの丈を綴りました。

まず生徒の英語力を伸ばそう、という教員としての「心」を説き、次に「体」として、基礎的な英語力、特に音声能力について丁寧に解説し、「技」としては基本中の基本の一斉授業での音読のやり方や、普通の教科書本文を使ったペアワークのやり方、そして現在最も効果的だと考えている「グルグル」(p. 128 参照)のやり方を解説しました。

100% 自分流の内容

そこには(いわゆる)「コミュニケーション」であろうとか、タスクベースにしようとか、第二言語習得研究の知見を取り入れようとか、いわんや文部科学省がその時々でプロモートしている概念を取り入れようとか、そういう意図はまったくありませんでした。(『大技・小技』の時にはまだ若かったので、少なくとも研究から得られた知見を取り入れようという vanity はあったと思います。)他人の言うことは気にせず、自分が自分の教室で自分の生徒・学生に対して実践し、感じ、その結果確信があることのみを書きました。2004年頃に「静流英語授業道」を旗揚げ、つまり自称し始めたので、一般的に言われていることを取り入れて書かねばならないという気持ちは完全にゼロになっていました。とにかく自分流の、自分にはこれが最高だと「わかっている」ことがらを、若い教師に伝えたい、教えたい、という気持ちのみで書きました。

実は今から数年前、日本の国立大学の教育学部で専任教員として英語教員養成をしている英語母語話者に、『大技・小技』と『心・技・体』に関して面白いことを言われました。

「『大技・小技』には、生徒同士にコミュニケーション活動をさせるなど、コミュニケーション・アプローチ的な内容なども感じられるのに、『心・技・体』になるとそれがまったくなくて、発音とか音読とかのトラディショナルな内容になっていますね。そして『心・技・体』は『大技・小技』の10年後に書かれている。つまり新しい本のほうがコミュニケーション度が落ちているということで、普通と逆ですね。」

このコメントはまさに正鵠を射ています。『心・技・体』執筆の時点では、英語教科書の本文が自分できちんと音読できて、かつ Read and Look Up の指導がきちんとできれば、その人は日本の英語教師の半分以上よりも力があり、その上、教科書本文を生徒にわかる英語で自由にパラフレーズできるならば、全英語教師の 90% よりも力があるだろう、という認識を持っていました。だからこそ、その最も大事な部分にフォーカスした内容にしたのです。教科書本文をきちんと習得させるという基礎の部分ができている、その後、味付けとして意味に焦点を当てたタスクやコミュニケーション活動をやればより効果的ですが、その基礎がなければ他の何をやっても無駄だということを他人の授業を見て何度となく痛感していたからです。

そして「外国語教授方法論」の龍虎

私は 1998 年 9 月から関西大学で教え始めましたが、関西大学大学院は 2002 年 4 月に外国語教育学研究科を開設しました。その講義科目のひとつに「外国語教授方法論」(英語)があり、私が担当することになりました。(その後 2009 年度までは専任教員として担当し、関西大学を離れた現在も非常勤講師として集中講義形式で担当しています。)年によって多少の違いはありますが、実際に中高の教壇で有効に機能する教授法の実践面をトレーニングする内容が中心です。

その「外国語教授方法論」の 2005 年度履習学生の中にいたのが本書の共著者となる小林翔氏と正頭英和氏です。ふたりとも大学を卒業してすぐ関西大学大学院に入学してきた英語教員志望のストレートマスターでした。どちらもキラキラ光る目をした個性的・意欲的な学生で、10 数名いた同期の履習者の中でも目立つ、いわば龍と虎でした。

授業担当者と学生という関係で顔を合わせたのはその 1 年だけだったのですが、その後も小林氏にはジャパンライム(株)の DVD『English あいうえお』に学部生にまじって出演してもらったり、正頭氏には関西大学で主催した英語教員対象ワークショップを手伝ってもらったりしました。ふたりとも「静流英語授業道の心・技・体」をこれでもかと注入した、最も遠慮なく接する機会のあった教え子の中に数えられます。

あれから 9 年間で、小林氏は東京で都立高校の、正頭氏は京都の

私立小学校の教諭として活躍中です。2014年10月現在、ともに教歴8年目です。小林氏(訳あって自称セバスチャン)は、『English あいうえお』を見ればわかるように、弾けるようなキャラクターの持ち主です。明るく、厳しく、元気よく、がモットーの授業は、その様子を言葉で伝えるのが難しいくらいアクティブでどんな生徒を相手にしても「セバス・ワールド」を作り上げてしまいます。

正頭氏は最初、中学校・高等学校に勤務しましたが、その英語授業の手腕を買われて、小学校に特に招かれ、現在は小学校英語教育に取り組んでいます。近年は英語授業のみならず学級経営や児童・生徒指導の面での実力を認められ、まだ若いにもかかわらずその方面のセミナー等に講師で招かれることも多くなっています。

どちらの授業も数回ずつ見せてもらっていますが、静流を基本にしつつ自分の持ち味を加えてアレンジし、それぞれ小林流、正頭流をつくりあげつつあります。彼らの授業をビデオ録画して「英語科教育法」で現在担当している学生に視聴させたい、と思わせるだけの「かくあるべし」という英語教育を実践してくれています。

本書のコンセプトの萌芽

2013年の6月に小林氏の授業を見る機会がありました。私は他人の授業を見ると正直いたたまれなくなることが多いのですが、彼の授業は見ていて知らず知らずと頬がゆるむのを抑えられませんでした。そこまでうれしくなるほどの、濃密な授業だったのです。その日同道していた教員志望の学部生を連れて行って良かった、と思わせる、とてもよい授業でした。

そしてその翌日、たまたま正頭氏が別の仕事で上京することがわかり、久しぶりに3人で会おうということになったのです。丸の内の和食店に集まった我々はそれぞれの近況を教え合い、英語教育を語り合いました。その時、交わした言葉のいくつかを、今でも印象深く覚えています

「最近、若手から『授業をどうしたらいいですか』とかアドバイスを求められて、ほんま思うんですけど、生徒に対する愛情がない奴は、他に何があってもダメですね。」「逆にそれさえあれば、方法論は後からつい

てくるんですよ。」「いやあ先生、おれ今そういうことを、めっちゃ本に書きたいんですよ!」「やっぱり授業の根本は愛ですね」「じゃあ本のタイトルは...『英語授業の愛・愛・愛』ですかね!」

こういう発言を聞き、10年前は英語教員志望のほんの「ひよっこ」であった彼らが、これだけのことを、自分の言葉として、真実の叫びとして心の底から発することができるようになるまで成長したことを非常に頼もしく思いました。それは、これらが決して「口だけ」でなく、こう言えるだけの実践に裏打ちされていることもわかっていたからです。

私個人としては、後進に訴えたいことは『英語授業の心・技・体』にすべて書き尽くしたつもりでした。しかしその「心・技・体」を注入した若い彼らがそれぞれの現場に出て行って自分なりにものごとを感じとり、それをさらに後に続く英語教師仲間にも訴えたいのであれば、きっと読むに値する内容になるという確信がありました。よし、じゃあ3人で言いたいことを出し合って本にしよう、と腹は決まりました。

こういう経緯で生まれることになったのが本書です。『大技・小技』よりも基本に焦点を当てたのが『心・技・体』ですが、その『心・技・体』よりもさらに根源的な、教師としての心の持ちようの部分掘り下げることができたと考えています。目先のテクニックではない、その時々流行がどうであっても変わらない、不易の部分を中心に書いたつもりです。

本書の最大の特徴のひとつは著者である我々3人が経験している校種の幅広さです。静は中学、高校、高専、大学、大学院で教え、小学生も6~4年生までなら多少の経験があります。正頭は高校3年から中学1年、さらに小学生の経験があります。小林も高校3年から中学1年、さらに大学生の経験があります。英語を教えるという仕事には相手が小学生、中学生、高校生、大学生で変わる部分と変わらない部分がありますが、本書によってその両方をつかんでいただけるのではないかと思います。

2014年10月

静 哲 人

目 次

本書の性格（はしがきに代えて）.....	iii
----------------------	-----

第 1 章 教師としての心を持つ

1 モデルとしての意識を持つ	2
2 入室したらひとりひとりにガンを飛ばす	4
3 自分のレベルまではうまくさせる	6
4 「方法」「価値」「体感」で人を動かす	8
5 「厳しさ」「楽しさ」「やさしさ」のバランスで人は伸びる	12
6 「授業方法」よりも影響があるのは「授業者」として知る	14
7 机上の空論より、実践を重視する	16
8 英語教師なら内容と形式の両方を聴く	17
9 生徒が寝るのは教師が原因と考える	18
10 教師は「恥」を捨てる	20
11 授業は本番ではなく稽古である	22

第 2 章 授業の基本をおさえる

1 ヒドゥンカリキュラムを意識する	26
2 空白禁止の原則を意識する	28
3 授業の基本サイクルを確立する	30
4 「しっかり」の共通理解をしておく	32
5 「わかる」と「できる」には時間差がある	34
6 「話を聞く文化」を創る	36
7 教師として「しつけ」をしっかりと指導する	38
8 誰もが参加したくなる授業環境をデザインする	40
9 個別のつながりを持つ	42
10 授業プランはゴールから逆算して立てる	44

11	自己表現の前に、教科書の英語表現を身につけさせる	48
12	ペア(グループ)ワークの前に一斉指導をしっかりとする	49
13	児童も生徒も学生も教える基本は同じである	52

第3章 音声指導の基本をおさえる

1	スペリングばかり気にせず、音を気にする	56
2	いたずらにスピードを求めない	58
3	対極を体感させる	64
4	音読における適切な声量とスピードを意識させる	66
5	音読のバラエティにこだわらず精選する	68
6	音読でのアドバイスは一度にひとつずつ与える	70
7	音読指導では必要なステップを踏む	72
8	CD音源をよく聴いて音についてコメントする	76
9	英語は「ものまね勝負だ」と思わせる	80
10	リスニング指導を答え合わせで終わらせない	82
11	歌を使って英語音節感覚を養う	88

第4章 授業方法を工夫する

1	「覚えること」から意識をずらす	94
2	配布プリントは作り過ぎず、精選して減らす	96
3	一斉授業とペアワークを分け過ぎず、小刻みに混ぜる	98
4	文法の説明は芸の後で行う	100
5	読みたくなる気持ちを刺激する	102
6	教科書本文を使って協同学習を促す	104
7	意識的に4技能を盛り込む	106
8	ゲーム的要素を取り入れて楽しく学ぶ	108
9	生徒を鍛えれば鍛えるほど、授業は有利に進む	111
10	英語授業の座席を固定する【小・中・高編】	112
11	英語授業の座席を固定する【大学編】	115
12	和文を「和訳」してから英訳する	117
13	ライティングでは必ずリライトさせる	122

14	可能な限りグルグルを行う	128
15	グルグルの成功のコツは失敗から学ぶ	140

第5章 宿題・テストをうまく使う

1	宿題を通して自立した学習者を育てる	148
2	タスクの成果を評価して記録する	150
3	テストを好きにさせる	152
4	英語は実技として評価する	154
5	発音をセルフモニターさせる	157
6	メルアドゲットして学生を「支配」する	158
7	定期試験より毎回の授業で成績をつける	162
鼎談：小中高大で変わること、変わらないこと		171
静流英語授業道 心・技・体 十五戒		184
私たちの授業を受けた生徒・学生の声から		186
あとがき		189
著者紹介		192



教師としての
心を持つ



1 モデルとしての意識を持つ

好むと好まざるとにかかわらず、中学でも高校でも英語教師が授業の中で英語を話すよう求められることがますます多くなるでしょう。その時に第一に留意しなければいけないことのひとつは、「生徒に音を聴かせている意識」「生徒に自分の口もとを見せている意識」を持ち、自分の口の動きおよび出てくる音声をきちんとコントロールすることです。

真似するに足る英語を

単なる英語ユーザーの目的は、伝達しようとする意味内容を伝達することです。その中身が相手に伝わりさえすれば、その伝わる道具の状態はどうであってもそれほど重要ではありません。語順を多少間違おうが、冠詞がなかろうが、発音がおかしかりょうが、その場の状況や文脈、および聞き手の想像の力を借りて、内容さえ伝われば目的は達せられます。

しかし英語の指導者は当然違います。英語の指導者は、「内容」ではなく「道具」の、つまり「伝達手段」の指導者です。指導の目的はある「内容」を伝達することではなく、その内容を伝達するために最良の「道具」「手段」を伝授することです。意味がわかるだけでなく、文法的に正しく音声的にも適切でかつクリアで、生徒が模倣しようとするに足る英語、worth imitating な英語、モデルにするに足る英語、である必要があります。そこが単なる英語ユーザーとまったく異なるところです。

モデル提示の意識があるか

この「モデルの提示」という意識が欠けているように思われる話し方をする先生が少なからずいます。「流暢さ」の位置づけを誤解しているのか、むやみにペラペラと早口で話す人がいます。しかもそれは、きちんとした英語がルールにのっとって変化した早口英語ではなく、聴こえなくてはいけない子音が聴こえないような、「ずさんな早口英語」の場合さえあります。

「ずさんな早口英語」をいくら聴いても、ネイティブの「正当な早口英語」が聴こえるようになることはありません。

早口でごまかさない

自信の無さかもしれません。ひとつひとつの音がいいかげんな英語を早口で無意識のうちにごまかそうとしているのかもしれません。競泳の練習方法で、フォームを改善しようとする時に、「できる限りゆっくりした動作で泳ぐ」というのが有るそうです。ゆっくりした動作で泳ぐ場合、フォームがおかしいと沈んでしまう、とのこと。フォームの良し悪しが、ゆっくりと泳ぐと白日のもとにさらされる、ということでしょう。英語も同じです。英語教師は細部をごまかすような話し方をしてはいけません。

通じるのは当たり前

また冠詞の有無、単数と複数の使い分け、時制の使い分けなどもボロボロの状態で話している先生もいます。そんな誤りだらけの英語を、生徒に聴かせていてよいはずがありません。「『先生も頑張っている』という姿を見せよう、という精神で思い切って話している」などという、情けない言い訳はナシにしましょう。頑張るのも通じるのも当たり前です。それで俵給をもらっている指導者ですから。

「商品」は丁寧に届ける

帰国子女であるとか海外経験が長いとかの理由で英語自体は見事な先生が、生徒がわかっているのかわかっていないのかもお構いなしに、まるで自分の見事な英語を誇ろうとしているがごとく、早口でペラペラ話すというパターンもよくあります。生徒は置いてきぼりの感じます。「生徒に聴かせる」意識が感じられないのです。

「細部まで聴かせるのだ、音を聴き取らせるのだ」という意識があれば、おのずと話し方も変わってきます。一挙手一投足つまり唇や舌や顎の動かし方すべてに神経を行き届かせ、コントロールした話し方をしてください。英語教師の口から出る英語はすべて「商品」ですから。 (静)

2 入室したらひとりひとりにガン飛ばす

授業を見て「ダメだな」と思うのは、授業の「しょっぱな」の挨拶時に、よそ見をしたり小声で私語をしたりしている生徒がいるのに、教師がそのまま授業を始める時です。中高では「起立」「礼」「着席」で開始することがほとんどだと思いますが、「起立」の際直立せず手を机について体を支えている生徒、「礼」できちんと頭を下げずに1テンポ早く着席する生徒、視線を前に向けずにそっぽを向いたままおざなりに礼をする生徒等々...を看過しているようでは、それだけで授業の中身もたかが知れていると感じます。そして実際に1時間見た結果、その悪い予感が的中することがほとんどです。

始めよければ...

日本という文脈の中の「学校教育」「授業」において最も大切であるはずの「けじめ」や「規律」をなおざりにしておいて、土台、まともな教育ができるはずがありません。挨拶をきちんとさせるという基本中の基本ができずして、英語をきちんと学ばせることができるはずはありません。

日本語の礼ではなく、Good morning, class! などの英語で始める場合も基本は同じです。英語で挨拶する前には起立させることがほとんどだと思いますので、教師がGood...と言い始める瞬間には全員の口を閉じさせたいところです。

そして着席した後もまた大切です。まずは着席した瞬間ざわざわとさせないことが重要です。もしざわついてしまったらそのざわつきをすぐに沈めることが肝要です。ざわつきを予防するためには、ざわついている暇がないように、ざわついていると出遅れて損をするような授業ルーティーンを作っておくことです。そうすれば対症療法をする必要自体がなくなるはずです。

授業も集会もオーケストラ

授業の開始はオーケストラの演奏開始と同じではないでしょうか。オーケストラが演奏を開始する時、全奏者が息を詰めるようにして指揮者のタクトの先を注視します。私語はもちろんよそ見をしている人もいません。オーケストラの演奏開始に求められるものと程度の差はあるでしょうが、授業開始に関しても集中が求められるのは同じです。理想的には生徒・学生の全員が視線をこちらに向けたのを確認して「よし」となって初めて開始したいところです。

ちょっと脱線しますが、これは学年集会や全校集会でも同じです。集会の司会には生徒指導主任などが当たることが多いと思いますが、司会者としての鉄則は、生徒が200人いようが400人いようが、(最初はとにかくどんな手段を用いても)全員が口を閉じた状態を作り出してから、「それではこれから〇〇集会を始めます」と宣言することです。それをせずに、ちょっとでもざわついた状態のまま、それにかぶせてマイクの音量の力を借りて始めてしまうと、もうそれは「終わりの始まり」です。「集会では黙らなくてもいいんだよ」というマイナスのメッセージを刷り込んでしまうからです(p.26参照)。ざわつきが大きくなり、それに負けじと大声を出さざるを得なくなる、という負のスパイラルに陥ります。

どうやって実現するか

ではどうしたら、全員が教師に注意を払っている状態で授業を開始することができるのでしょうか。私のやり方は、教室に入ったら生徒ひとりひとりに視線を合わせようとすることです。一昔前の若者言葉で言うなら「ガン飛ばす」のです。人間対人間でも、動物対動物でも、相手の目を見るということは、場合によっては威嚇行動であり、喧嘩を売るぞ、喧嘩を受けて立つぞ、という意思表示です。そうです。生徒に「喧嘩」を売りましょう。「こら、オレは本気だぞ。本気になってお前たちに教えるぞ。お前たちも本気にならないと、承知しないぞ。」という気持ちを込めて、ガンガン、ガン飛ばしましょう。それを毎回繰り返していると、教室の前に立っただけで生徒・学生はあなたのオーラ、本気、殺気(^)を感じて自然に話をやめるようになります。そうなればもうこっちのものです。(静)

3 自分のレベルまでうまくさせる

我々はノンネイティブ英語教師です。ネイティブと同じレベルでは話せませんし、書けません。しかし我々ひとりひとりがどのようなレベルにあるとしても、少なくとも自分が教室で教えている生徒たちよりはずっと上にはいるはずで、(万一、そうでもない、ということであれば給与を返すべきです。)そうであるならば、我々は自分の生徒を、とりあえずは今自分がいるのと同じレベルまでは引き上げることができるはずで、そしてまた当然そうすべきです。

引っ張り上げる気がない？

どうしてこれほど当たり前のことを書くかというと、そうする気がないようにしか見えない先生が現実に少なくないどころか多いからです。生徒のコーラスリーディングがまったく平板で英語らしくない読み方でも、とりあえず声が出てさえいれば後は知らん顔。「知らん顔」というのは、生徒が声を出している時に、生徒の口もとを見ておらず、次に自分が読むところを準備のために見ているようにしか見えない、という意味です。)個人を指名して何か英文を答えさせても、それが「合って」さえいれば、ベタベタのカタカナ英語でも知らん顔。母音挿入しまくっていても知らん顔。

まったく知らん顔でない場合も、通り一遍に「そういう読み方じゃなくて、○○のように」と全員に向けて一応言うだけ。そのアドバイスによって改善が見られたかチェックして、必要ならさらに別の角度からアドバイスする、という発想はないように見える人も多いです。

授業でもPDCAサイクルを

業務管理の分野に「PDCAサイクル」という用語があります。Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Act(改善)の4段階を繰り返すことによって、業績や品質を改善してゆく手法です。Checkの部分ではSeeであったり

Studyであったりするバージョンもあるようですが、要は何かをやったら／やらせたら、やりっぱなし／やらせっぱなしにせず、出来不出来をチェックし、不出来なら改善の方法を考える、という、言われてみればごくごく「当たり前」のサイクルを指しています。

事業に限らず授業でもこれをするのは「当たり前」ではないでしょうか。生徒に音読・発表させてまったく何もアドバイスしない人は論外ですし、何か言っても言っぱなしの人は、「そのアドバイスが実際に有効に働いたかどうかcheckしてみよう」という気持ちを持つべきです。

自信がなくても生徒よりはうまいはず

「自分も大してうまく話せないから、生徒にもあまり多くを求める気にならないのです。だからとりあえず言えればヨシと思っているのです」というのが本音の人もいるのでしょう。しかしその考えはダメです。ライティングのことを考えてください。我々はもちろんネイティブと同じレベルの文はなかなか書けません。「自然さ」に欠けることも多いでしょう。しかし我々が書く英語には文法的誤りはまずなく、とりあえずは「まともな」英語であり、生徒の書くものより格段に優れた英文のはずです。

だから生徒の英語をとりあえず我々と同じレベルにするのは間違いなく生徒のためになることです。そのために生徒の英文に間違いがあれば添削するのです。音読も同じです。放っておけば、生徒の出す個々の「音」(オン)、リズム、ピッチの使い方は必ず英語としては「間違っ」ています。それをとりあえずは自分と同じレベルにまで引き上げようと努力するのが指導者としての正しい態度です。

言葉に^{ことだま}言霊を込める

「そういう読み方ではダメなのだ」「英語らしく読ませねば／言わせねばこの子たちのためにならないのだ」と本気で信じているならば、同じことを言っても言葉に言霊が宿ります。言霊のある言葉は子どもを動かします。自分と同じレベルまで引っ張ってやることは誰にでもできます。愛する生徒たちを引っ張り上げようではありませんか。(静)

4 「方法」「価値」「体感」で人を動かす

山本五十六の有名な言葉に「やってみせ 言ってみせて させてみて 褒めてやらねば 人は動かじ」というものがあります。有名な言葉で、子を持つ親や、部下を持つ上司などに人気だそうです。教師の間でも知っている人は多いでしょう。

人を動かす原理原則

この言葉は、「見本を見せ、説明し、やらせて褒める。そうすれば人は動くよ」という意味です。見本を見せるだけ、説明するだけ、やらせるだけでは、人は動かないよ、ということを教訓的に教えてくれているのです。私は、この言葉を自分なりに解釈しています。それは、人を動かす原理原則は「方法→価値→体感」である、ということです。

「方法」

まずは、方法です。これは「やってみせ」の部分に当たります。どんな活動でもそうですが、方法をまずは教えなければいけません。例えば、Read and Look Upを教える時、教師は見本を見せなければいけません。「こんなふうにするんだよ。見ていてね。」と言い、まずやってみせなければいけません。「当たり前じゃないか」と言われそうですが、そうです。当たり前です。そうしないと子どもは動きようがないのですから、当然です。しかし、単語学習を例にとると、「明日 No. 1 から No. 50 までの英単語のテストをやるからな。しっかり書けるように勉強してこいよ!」と、単語学習の方法を説明せずに(つまり「やってみせ」ずに)テストだけを行っている教師は意外に多いのではないのでしょうか。「やってみせ」の部分は「当たり前」なのですが、よく考えてみると、実はしていなかった、と感じる部分が出てくるはずですよ。

「価値」

次に価値です。私は「言って聞かせて」の部分が「価値」を教えることなのだと考えています。つまり、学習の意義・価値を語り聞かせなければいけない、ということです。

教師は「学校は勉強しに来る場所です」という言葉をよく使います。英語教師の中には、あるいは他教科の教師の中にも、言葉にはしないものの（言葉にしている人も多くいますが）、「勉強はやって当たり前だ！」と、無意識のうちに考えている人が少なくありません。そのせいか、「なぜ勉強するのか」「なぜこの学習を行うのか」ということについての説明が行われていない傾向があるように感じます。それが故に、「この学習をすることにどんな価値があるのか」「この学習方法にどんな意味があるのか」などの基本的なことをわからず、何となく勉強をしている子どもは少ないと思います。

単語学習、発音練習、暗唱訓練。どんな英語学習法においても、子どもがその学習の意味、つまりなぜその勉強をするのかということを知っているのと知らないのとでは、子どもの意欲・行動は見違えるように変わります。この事象は、英語だけに限定されたものではありませんが、特に英語学習への追い風が強い現代社会において、英語科の先生方がこういう学習の意味を生徒に語っていないことが多いように感じます。「音読は英語学習において当たり前」と頭の中に刷り込まれている教師は、「なぜ音読をするのか？」という疑問に答えるような「音読の価値」を語らないまま音読をさせていることがあります。

目的・価値のわからないまま活動をしている子どもたちは、ゴールもわからずに走り続けているマラソンランナーと同じです。やがてスピードは落ちて歩き始め、「ゴールはどこだ？」と疑問を持ち、「何のために走っているの？」とグチを言うようになります。これが英語授業における子どもの「何で英語を勉強しないとダメなの？」なのです。

ぜひ学習方法の目的や価値を語りましょう。英語の価値を語りましょう。「価値観の押し付けはよくない」という批判が飛んで来そうですが、子どもたちは、私たちが価値を教えることによって、物事を一定の見方しかできなくなってしまうほど単純ではありません。将来、必ず自分の頭で価値

を考えるようになります。そしてその考える過程で、私たちが指導した価値観が、判断材料のひとつとして活用されます。教師にとって、これほどうれしいことはありません。もしその子どもが「やっぱり違うな」と判断したのであれば、それはそれで構わないのです。そんなことよりも深刻なのは、何も語らずに英語を勉強させていると子どもは「なぜ？」を頭に抱きながら勉強してしまうことです。むしろそのほうが「価値観の押し付けはよくない」という価値観を子どもに押し付け、結果として子どもを迷わせているのではないかと私は危惧します。私たちは教師です。自分自身の持つ「価値観」を、堂々と子どもに語れるようでありたいものです。

「体感」

最後に体感です。「させてみて 褒めてやらねば」の部分です。これ私は「体験させて、納得させる」と捉えています。学校教育のすべての活動には、意味があり、価値があります。英語授業の中でも同じです。すべての活動には意味があり、価値があります。「価値を語りましょう」と上述しましたが、語っただけで納得して動いてくれるのであれば、世の中のほとんどの授業はうまくいっています。価値を語ることは大切ですが、それだけでは足りないのです。

何が足りないのか。それは体感です。「音読をすれば英語力が伸びるよ」ということを語ったとすれば、それを体感させてやらなければいけません。もちろん、音読をすれば英語力がすぐに伸びるのか、と言われれば、答えはNoです。すぐには伸びません。しかし「長期的に見て伸びていく」という視点では子どもたちは納得できません。それが今の子どもたちです。すぐに結果が現れないことに対して我慢ができないのです。「音読をすれば英語力が伸びるよ」と教師が価値を語ったのなら、すぐにそれが体感できるような仕組みを作らなければいけないと私は考えています。たとえそれがほんの少しでも、です。それができないのであれば、「音読をすれば英語力が伸びるよ」という価値の語りは、あまり意味を持ちません。子どもの心には届きにくいからです。

では、どうするか。私の場合、「音読をすれば英語力が伸びるよ。具体的に言うとね、声に出して読んだほうが効率よく覚えられるんだ。試して

みよう。」と言い、初見の英文を与え、1分間覚える努力をさせます。1分後に覚えた文章をノートに書かせます。1分はかなり短いので、全文を書くことはすべての子どもにとって無理です(逆に言うと、そういう英文を準備します)。その後、音読して覚えるグループと、目だけで覚えるグループとに分けます。適当な時間を取り、先ほどの要領でノートに書かせます。そして、1回目の英文と2回目の英文では、どれぐらい覚えている量が伸びているかをカウントさせます。するとほとんどの場合、音読グループのほうが伸びています。そこで「ほらね。音読する方が効率的でしょ。だから音読を授業では大切にすね」という価値の語りに、子どもの体感がついてくるので「なるほど!」という納得が子どもに生まれます。納得した子どもは、積極的に音読に取り組むでしょう。

ここでは音読を例にとりましたが、これは音読だけに言えることではありません。すべての学習活動に言えることです。もちろん、授業だけに限定されることでもありません。「体感」に関しては「対極を体感させる」(p.64 参照)にも詳しく書きました。「体感させる」ということは、意外と難しいですが、「対極」ということがヒントになると思います。

「価値」だけは外せない!

「方法」も「価値」も「体感」もどれも大事です。ですがこの3つの中で、私は「価値」が一番不足しているのではないかと考えています。意味がわからないことをやらされることほど苦痛なことはありません。それは大人でも同じはずです。

「体感」に関しては、「可能な限り体感させよう」くらいでも良いと思っています。人の成長には時間がかかる、という現実があるからです。すぐに体感させることが難しい場合も少なくありません。私もできるだけ体感させて納得してもらおうように日々努力をしていますが、すべてとはいきません。

しかし「価値」は必ず語るべきです。授業の活動だけでなく、行事、挨拶、話の聞き方など、教師の教えることには必ず価値があるはずです。それをしっかりと語れるようにしなければいけないと、私は強く感じています。

(正頭)